

火災対策

いのちを守る10のポイント

◆4つの習慣



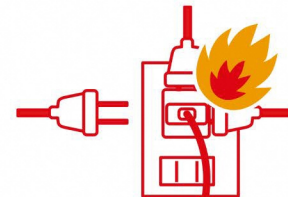
1 寝たばこは絶対にしない、させない



2 ストープの周りに燃えやすいものを置かない

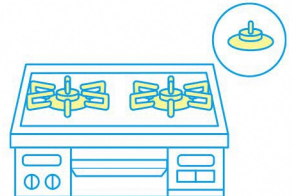


3 コンロを使うときは火のそばを離れない

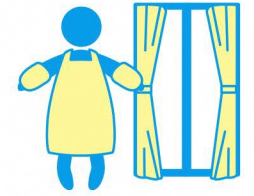


4 コンセントはほこりを清掃し、不要なプラグは抜く

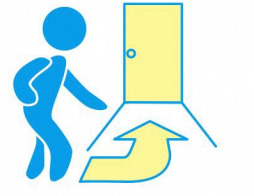
◆6つの対策



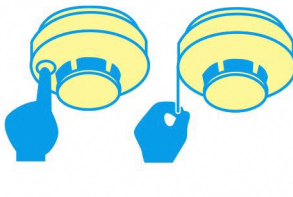
1 火災の発生を防ぐために、ストーブやコンロ等は安全装置のついた機器を使用する



2 火災の拡大を防ぐために、部屋を整理整頓し、寝具、衣類およびカーテンは、防災品を使用する



3 高齢者や身体の不自由な人は、避難経路と避難方法を常に確保し、備えておく



4 火災の早期発見のために、住宅用火災警報器を定期的に点検し、10年を目安に交換する



5 火災を小さいうちに消すために、消火器等を設置し、使い方を確認しておく



6 防火防災訓練への参加、戸別訪問などにより、地域ぐるみの防火対策を行う

消火器の使い方

消火器は、火災の起きている場所の近くまでは片手または両手で搬送し、消火に安全な場所、概ね7、8メートルまで近づきます。そこで操作をしないと運んでいる間に誤射し、火災現場に到着したときには、放射し終わってしまうこともあります。消火器が重く、片手で運べない人は、両手で抱えるように搬送し、障害物につけないよう気をつけて運びます。

使い方手順

1 ……

まず最初に黄色の安全ピンを引き抜きます。



2 ……

次にホースを外し火元に向けます。



3 ……

そしてレバーを強く握って放射します。消火器が重いときは、消火器を置いたままレバーを握って放射する方法もあります。



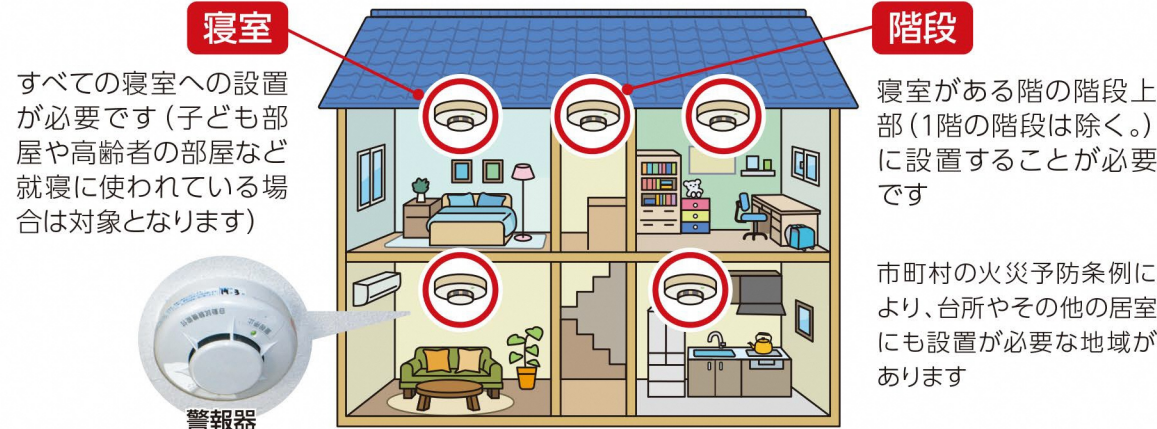
放射の際は、火の根元をねらって、手前からほうきで掃くように消火剤を放射して下さい。消火剤を効果的に放射するため、また、自分の身を守るために消火器は風上から放射します。室内においては、逃げ道を確保し、出入り口を背に放射します。放射時間や放射距離は、本体に必ず表示してありますので確認しておくといでしょう。



◆ ……
ホースは、先端を持ちましょう。ホースの途中を持つとホースの圧力などからねらいが定まらず、的確な場所に放射できないおそれがあります。

住宅用火災警報器の設置義務化

家庭内での火災の発生をいち早くキャッチし、知らせてくれるのが、住宅用火災警報器です。住宅用火災警報器は、火災により発生する煙を感知し、音や音声により警報を発して火災の発生を知らせてくれる機器です。通常は、感知部と警報部が一つの機器の内部に含まれていますので、機器本体を天井や壁に設置するだけで、機能を発揮します。



寝室

すべての寝室への設置が必要です(子ども部屋や高齢者の部屋など就寝に使われている場合は対象となります)

階段

寝室がある階の階段上部(1階の階段は除く。)に設置する必要があります

市町村の火災予防条例により、台所やその他の居室にも設置が必要な地域があります

警報器

雪害対策

大雪災害

雪崩、除雪中の転落事故などの豪雪地帯特有の災害のほか、路面凍結などによる交通事故や歩行中の転倒事故など、豪雪地帯以外でも発生する災害もあります。雪害に遭わないためにも、雪に対する正しい知識を深めておくことが大切です。

車による雪道での注意点

降雪時、降雪後には路面の凍結や視程障害(吹雪などによる視界不良)による事故に注意が必要です。

こんなところでは路面の凍結に注意!

トンネルなどの出入口
日陰になることが多く、局所的に路面が凍結している場合があります

橋梁(橋げた)
ほかの路面が凍っていないくても橋の上だけは凍結している場合があります

信号交差点
車が発進や停止を繰り返すことにより、路面が非常に滑りやすくなる場合があります

他には…

- スムーズに発進
マニュアル車なら2速で、オートマ車ならクリーブ現象を利用して、やんわりと発進をしましょう
- フットブレーキを多用しない
下り坂や交差点ではフットブレーキのみに頼らず、エンジンブレーキを活用しましょう
- カーブでのブレーキ
カーブ手前の直線のうちにブレーキングやシフトダウンを終えましょう
- わだちのある道の運転
わだちに沿って走った方が車は安定します
- 降雪時・吹雪の運転
日中でもライトを点灯させ、溜まった雪はデフロスターを使って溶かしましょう

除雪中の注意点

雪下ろしの事故の場合、屋根からの転落事故が多く、高齢者や1人での作業中に多く発生しています。油断や過信をすることなく、安全な対策を講じて事故を防ぎましょう。

事故防止のポイント

安全対策用具などの手入れや点検をしましょう
古くなり壊れていないか定期的に点検し、使いやすくしておきましょう

安全な装備で行いましょう
安全帯やヘルメットなどを着用し、命綱はしっかりと固定しましょう

作業は2人以上で行いましょう
家族や隣近所にも声を掛けましょう

携帯電話を身につけましょう
緊急時に家族や緊急医療機関などにすぐに連絡を取れるようにしておきましょう

建物の周りに雪を残しましょう
落下した場所に積雪があることで、被害を軽減できる場合があります

はしごは固定しましょう
ロープや器具を使用し、屋根に対して決められた角度でまっすぐ立てましょう

歩行者の雪道での注意点

歩行時の転倒にも注意! 滑りやすい場所を知りましょう

- 横断歩道の白線の上
乾いているように見えても薄い氷膜ができて、滑りやすくなっている場合があります。
- 車の出入りのある歩道(駐車場の出入口、ガソリンスタンドなど)
出入りする車のタイヤで路面上の氷が磨かれ、非常に滑りやすくなっている場合があります。
- バスやタクシーの乗り場
踏み固められて滑りやすくなっている場合があります。また、歩道と車道との段差にも注意しましょう。
- 坂道
上りよりも下るときの方が滑って転びやすく危険です。下るときは特に注意しましょう。
- ロードヒーティングの切れ目
雪や氷が融けておらず段差ができて、部分的に滑りやすい状態になっている場合があります。

雪崩(なだれ)から身を守るために

雪崩は、豪雪地帯で暮らす住民だけでなく、スキー・スノーボードや登山、温泉などのレジャー目的で訪れる多くの観光客も巻き込むおそれがあります。厳寒期や春先に発生しやすく、最大で時速200kmとスピードが速いため、発生に気付いてから逃げることは困難です。もしも、雪崩の前兆を発見した場合は決して近づかず、すぐに通報してください。

■万が一、雪崩発生の際に遭遇したら?

- 雪崩が自分の近くで起きた場合
 - 流されている人を見続けること
 - 仲間が雪崩に巻き込まれた地点(遭難点)と、見えなくなった地点(消失点)を覚えておく
- 自分自身が雪崩に流されてしまった場合
 - 雪崩の流れの端へ逃げる
 - 身体から荷物をはずす
 - 雪の中で泳いで浮上するようにする
 - 雪が止まりそうになったとき、雪の中での空間を確保できるよう、手で口の前に空間を作る